

# Faculty Development と教育心理学

話題提供者： 宇田 光（松阪大学政策学部）  
 向後千春（富山大学教育学部）  
 市川伸一（東京大学教育学研究科）  
 指定討論者： 織田揮準（三重大学教育学部）

企画者： 益谷 真（敬和学園大学人文学部）  
 司会者： 益谷 真（敬和学園大学人文学部）

## 【企画の趣旨】

大学等の高等教育機関において、教師としての資質向上をはかる取り組みが、活況を帯びてきている。その背景には、大学等の大衆化と学生の質的な様変わりによって、教育力が強く求められるようになってきた事や、学習環境が急速に変化してきた事などがある。学生と教員との知的な相互交流を目指しつつも、学生の主体性や目的意識を期待し、一方通行の教授だけで、学生は何とかわいてくるといった状況では、もはやなくなってきているのである。

FDの中核は、やはり授業の改善であろう。これまでも教授方法については、さまざまな工夫が提案されてきている。しかし、そういった個々の授業設計や運営は、授業担当者の創意や工夫として敬意を払うべきではあるが、いわば授業の腕を磨くという教育する側の視点から語られることが多い。他方、教育心理学では、むしろそういった教授法を支える学習のメカニズムや学習者の特性に関心をよせ、実践もふまえながら研究成果を積み上げてきている。教育心理学的なプロスペクトは、教育の方法や技術を支える能動的な学習者の学びや習いを中心として語られるのである。

そこで本シンポジウムでは、単なる授業のやり方の改善を越えて、授業の効率ではなく学習の効率を、あるいは教育の効果ではなく学び方を向上させるいくつかの具体的な取り組みをとりあげ、生涯学習の出発点でもあり、また、初等中等教育の教員を養成している高等教育において、教育心理学が今後も担っていく役割について、議論を深めていくために提案された。

これ迄に多くの研究と実践をもたれている話題提供者からは、授業に参加する学生の知的好奇心を刺激する手だてや、学習環境としてのインターネットの活用、総合的な学習としてのゼミの運営、といった内容について話題提供を受け、指定討論

者からは、学習の成果を誰がどのように評価するのかという観点を議論の口火としていただき、フロアからも積極的な発言を期待したい。

## 【話題提供】

講義という枠からの脱却：当日ブリーフレポート方式の導入

宇田 光

筆者は昨年、当日ブリーフレポート方式（BRD）を提案した（2000a, b, c）。いろいろな分野の講義で広く使えるように、定型化された方式である。講義の冒頭でテーマを発表し、90分間で簡単なレポートを書くよう求める。このことで、学生の当日の授業における到達目標を具体化し、注意集中度を高めることをねらう。

BRD実施当日の手順は、次の4段階である。

（1）確認 教師はBRD方式の実施を宣言して、テーマおよび執筆時間を板書する。

（2）構想 用紙を配布し、10分間前後の考慮・構想時間を与える。

（3）情報収集 受講生が互いの構想を知る機会をもうける。教師は発問して、必要な情報を引き出すよう努める。また、教師は質問を受けたり、説明を行う。板書、指名、教材提示など、通常の講義と同様に自由に展開する。

（4）執筆 当日ブリーフレポートの執筆（20分程度）。教師はこの間机間巡視し、質問があれば個別に回答する。書けた人から直接教師に手渡すかたちで提出し、退室する。なお、名前の示す通り、レポートは当日においてのみ受理する。

「講義」という枠組みでは、教授者が説明するということが前面に出てしまう。講義室は「学生がノートを取る場」になってしまいがちである。一方、当日ブリーフレポート方式の枠組みでは、講義室を「学生がレポートを書く場」とし、教授は学生の必要に応じて説明してレポート執筆を助

ける、という枠組みになる。

#### 文献

宇田 光 2000a 当日ブリーフレポート方式による講義—受講生が集中できるBRD 学校カウンセリング研究, 3号, 37-44.

宇田 光 2000b 当日ブリーフレポート方式による講義 大学教育学会第22回大会

宇田 光 2000c 大学における学生参加型講義への取り組み(4) —当日レポート方式の導入 日本心理学会第64回大会発表論文集, 1117.

### 個別化教授システム(P S I)による授業実践とその効果

向後千春

個別化教授システム(Personalized System of Instruction, P S I)は、F. S. Kellerによって1960年代に提唱され、アメリカの高等教育で数多くの実践がなされた。行動主義から認知主義への流れの中でPSIの実践は減ったが、最近、Webベースの学習/訓練や遠隔教育という新しい文脈によって、このシステムの考え方が見直されつつある。

日本の大学に適用するためのマニュアルとして田中(1989)がある。P S Iの特徴は次のような点にある(Anderson, 1996)。

- (1) 完全学習を指向している
- (2) 自己ペースで進める
- (3) 講義は学生の動機づけを高めるために行うだけである
- (4) 印刷された学習ガイドを使う
- (5) プロクター(指導者)が通過テストの成績を評価する

学習内容は単元化されており、それぞれに導入、明確な目標、学習資源、課題が含まれており、単元の通過テストの準備ができるようになっている。通過テストはプロクターが実施し、プロクターには大学院生や大学の上級生が当てられる。P S Iにおいて、教員は授業全体の方向付けと設計を行い、通過テストをデザインし、また学生の学習を助けるような学習資源を準備するという仕事を請け負う。

実際には、独習できる教材をHTML形式で開発・記述し、それをCD-ROM(あるいはネット)で閲覧する方式で授業を運営している。授業科目は「統

計学」や「情報処理」、「C言語プログラミング」など積み上げ型のものに適している。また、授業評価では一斉授業形式のものよりも、受講生による評価が高い。

### 総合的学習と大学でのゼミ活動

市川伸一

総合的学習は、もともと大学でのゼミの活動や卒論研究がモデルとなっているという面がある。すなわち、各自の関心に基づいて、調べ、考え、発表し、検討しあうというテーマ学習という形式になっている。ところが、近年、初等中等教育での総合的学習の実践が飛躍的に発展し蓄積されている反面、大学でのとりくみには大きな変化がないまま取り残されてしまった感がある。筆者自身の大学や大学院のゼミにおける試みと、初等中等教育での先進的な学習活動を対比させながら、今後取り入れあうことが可能な点を考察していきたい。特に、テーマ設定のしかた、電子メールでのコミュニケーション、プレゼンテーション・スキル、コンピュータ利用スキルの浸透、インターネットの情報収集と発信などに関して、双方が学びあう点が多々あるように思われる。

#### 【指定討論者の紹介】

F Dの研究開発や研修を積極的に先導してきた文部科学省メディア教育開発センターでは、授業改善の研修会を過去2年にわたって継続的に開催してきたが、織田揮準先生は、その最終回で講師を務められた。教科教育や教育工学関連の学会でも精力的にF D関係の研究を発表されてきている。先生が開発された「大福帳」方式は多くの教員が利用させてもらっている。科研費を受けた研究成果を報告されている。平成5年度(課題番号05808020「授業改善を支援する教授自己点検・評価項目データ・ベースの開発研究」)、平成9~10年度(課題番号09680217「学生からのフィードバック情報を取り入れた授業評価・授業改善システムの開発」)等。